



「旅立ちの地」エッセイコンテスト

入賞

きさらづきやつつあい

山口 史絵 鹿児島県

のサイズが気になり彼の居ない隙に大きめを買ひ足した。割れ物に緩衝材も挟んだ。湿布薬も忍ばせた。夫からは過保護と笑われながらこっそりお節介をしつくした。彼が就く先は二歳違いの長女も二年前入社している。彼女の見送りの時には、彼がまだまだ親に手を焼かせる時期だったので別れの寂しさはほとんど感じなかった。彼女には心配させない実力があつたからかな？その彼女が木更津寮への入寮、引越しを手伝ってくれるというから頼もしい。そんな心配をしている間に、旅立ちの朝を迎えた。

いちき串木野市別府から鹿児島空港までは下道で二時間弱かかる。一便に乗るため朝四時三十分の外は真っ暗だ。しかし彼が袖を通したワイシャツは爽やかで白が眩しい。玄関ドアでリクルートスーツの彼とちょっと厳しい表情の夫、マスカラし忘れた私の三人で写真を撮った。もちろんタイマーで連写した。三ヶ月経った今も見返す度に胸がきつくなる。

年度末に年休が取れない私は、彼が保安検査場をくぐった後、屋上で機体と天候を確認すると鹿児島市内の勤務先へ急いだ。

車中では夫とくだらない会話が続いた。

「今晚からおかずが少なくなるね」

「あのクローゼットの荷物をロフトに押し込もう」

一人減った寂しさを、再スタートと捉える二人の努力の会話だった。スーパーへ行くたび

「バナナと菓子パン要らないか、制汗シート要らないか」

と売り場ごとに彼を思い出すことがゴールデンウィークまで続いた。制服のアイロン掛けもしなくなくなり、アイロン内の水を捨て忘れてしまうこともあ

つた。

我が家は彼が生まれる前から鹿児島中央駅の近所に住んでいたが、波の音が聞こえる生活に憧れ、いちき串木野市へ昨年引っ越してきた。高校生だった彼を説得するため、照島海岸の猫の多さとスケボーができそうな環境を見せて回った。引越した後は、彼は学生カバンに猫の餌を入れ、神村学園前駅と自宅の通学途中で野良猫とスキンシップするのが日課だった。デートでも照島神社をよく散歩していたようだ。

新しい家は二人で住む前提で作ったので、一人減ってもガランとしていることはないのです。それは良かった。

夫婦だけの時間が二十一年ぶりに再スタートした。夫は芝刈りや家庭菜園に励み、私はその野菜をふんだんに使い料理をする。週末はSuppや、釣り、温泉巡りにカフェ巡り、地域のお祭りにはくまなく参加し、いちき串木野市の新生活を飽きることなく満喫中である。

これまでは毎年、毎月、学校行事に追われたが、もう自分の仕事のスケジュールのみとなる。

四十七歳、まだまだ元気とやる気は充分だ。本当に好きなもの、会いたい人、行きたいところ、続けたいこと、作りたいもの、驚くような何かを探して子供達に教えてあげよう。

そして、木更津キャッツアイもいつか観たい。きつと木更津の猫たちも海でのんびり過ごして、彼は癒されているだろう。

「ねえ、木更津キャッツアイ知ってる？」  
末っ子が久しぶりに話かけてくれた。思春期の彼にとって母がウザいのはわかっているのに、連絡以外はなるべく話をしていなかった。久しぶりの会話に実は胸が躍っていた。彼は最近とても忙しい。就職先も決まり、配属通知が届いたかと思ったら千葉支社勤務の内示を受けて、さつき東京から帰鹿したばかり。入寮先が木更津市だったので人事の方に

「『木更津キャッツアイ』のとこだよ。」

と半笑いで言われたのが気になっていったようだ。

彼はスケボーにしか興味が無い十八歳、ドラマは見ないし世代も違う。私はほころんだ顔をスマホで隠しながら、ドラマのウィキペディアから説明した。控えめに言ってやんちゃな町：半笑いの意味がわかったようだ。四月から過ごす寮への不安が増したせいかな、荷造りの段ボールはなかなか埋まらなかった。

必要な日用品は自分で揃えさせたが、洗濯ネット